

1. 日時 平成 21 年 1 月 8 日（木）18：30～19：30
2. 場所 東海テクノ交流館リコッティ 3 階 第 2 会議室
3. ゲスト 妹尾和威氏（現在、ITER 機構に、Visiting Researcher として滞在）
4. ファシリテーター 杉本 誠 原子力機構 ITER 協力調整グループリーダー
参加者 7 名

5. 内容

現在、ITER 機構において Visiting Researcher として作業されており、今回、面接試験を受けて ITER 機構の職員として採用されることになった妹尾氏をゲストとして迎え、ファシリテーターが質問を返し、ゲストがそれに答えるという対談形式を進めた。概要は以下のとおり。

1) ゲストの研究経歴と ITER 機構で働く動機について

もともと、三菱電機（株）で医療用の MRI やリニアモーターカー等の超伝導マグネットの研究・開発をしていました。その後、核融合科学研究所に助手として移り、核融合の大型超伝導マグネットの研究を行ってきました。今は ITER 機構で Visiting Researcher として働いておりますが、最近採用試験に合格し、近々、専門職員（TF コイルデザイナー）として ITER 機構と契約する予定です。今回、ITER 機構職員に応募した動機は、これまで一貫して超伝導マグネットの研究・開発を行ってきましたが、この分野では世界的に見て ITER 機構が現在一番アクティブで魅力的だと思ったためです。

2) 採用試験について

面接では、ネガティブな発言は必要ありません。とにかくストレッチして、自分を採用すべきと面接官に思わせることが大切です。“プロフェッショナル”らしく、滑舌よくいききたいものです。JAEA の HP で見た面接の模擬 DVD は大変参考になりました。あれはかなり本番の面接の雰囲気に近いと思います。

面接を受けるにあたり、自分で想定質問を作り、事前に英文を書きおきました。この際、DVD に紹介されている質問例は大変参考になりました。

今後の受験者には、どこが自分のコンピタンスか認識してほしいと思います。それが、ITER が必要とする人材と合致していることを確認し、自信を持っていただければと思います。

3) ITER 機構での仕事について

現在 Visiting Researcher として超伝導マグネットの素線および導体の調達活動、主に品質管理を担当しています。春からは TF コイルデザイナーとなり、それに伴い業務内容も変わります。マグネット部門は、日本、中国、韓国、インド、ロシア、アメリカ、スコットランド、フランス、ベルギー、スペイン、オランダ、イタリア、オーストリアという多国籍チームで、総勢 20 人程度になります。上司はよく仕事をする人で、「とにかく自分一人で考えるな、人と関われ。」とアドバイスしてくれます。同僚には ITER 機構に来る前から知っている人が半分程度います。Visiting Researcher として赴任した際に、上司から「Visiting Researcher だろうと職員だろうと、一切分け隔てしない。」と強く云われ、実際そのような

環境で仕事をしています。

超伝導技術の大型機器応用のコミュニティは規模が小さいのに、ITERが世界中からタレントを集めているという構図になっています。支援スタッフはよく仕事をします。派遣スタッフで、ITなどに関わる若い人の能力も高いです。日本の職場と比べると、議論ベースで仕事が進む、ということ強く感じます。

勤務時間は8:00~18:00くらいまでとなっています。通勤バスを利用していますので定時に帰宅します。昼食時間は日本よりも長いです。土日はお休みで、バカンスが年に2度ほどあります。

4) 現地での生活について

ビザは、ITERは特別扱いで「ITERビザ」を取得することになっています。このビザの取得は比較的容易でした。

住んでいる所はエクサンプロバンスです。エクスで最も有名なミラボ一通りに面した家に下宿しています。家賃は600ユーロ/月で、他と比べて破格に安い家賃です。そのためか雨漏りがします。食事は主に自炊ですが、最近ランチくらいは外食するようになりました。フランスの食事よりは、もちろん日本食の方が好きですが、当地にも野菜や魚も結構あり、健康的な食事ができると思います。最近の円高に関しては、これから正職員になるので、個人的には、できれば円安になって欲しいと思います。

最近、週末は余暇を楽しむようになりました。パリにはTGVで片道3時間、6000円くらいのチケットで行けます。ウィーンにも行きました。長期休暇は帰国します！日本に帰るとその後、元気が出ますので。

5) 今後の豊富、メッセージ

超伝導マグネット、特にTFコイルはトカマク本体の背骨のような重要な機器です。また、TFコイルをはじめとした超伝導コイルは調達時期が一番早いため、ITERで最も前を走るトップランナーとしてプロジェクトを前進させていく所存です。しかし同時に、超伝導コイルの研究開発にこれまで長く携わっているので、その難しさも十分に認識しているつもりです。日本の国内機関や産業界の皆様の知見・実力を最大限に引き出して、より良いものを作りたいと思っています。

今後ITER機構に入りたいと思っている人には、漠然と何か「やりたい」と言うだけではなかなかやっていけないのが、国際機関ITER機構と考えますので、自分がITERに対して何が出来るかをよく考えて応募されたら良いのではないかと思います。その一方で、やはり日本人のITER機構職員が多くなって欲しいと思います。とにかく、母数が増えて欲しいですね。

6. 参加者との質疑応答

Q1: ITER機構の仕事では「人との関わり」が大事だと言われましたが、日本とはどのように違うのでしょうか？

A1: 自分ひとりでは仕事は進みません。私は前からの知り合いが多くて助かっています。インターフェイスの調整などでは、関係する人たちとよく議論しなければなりません。日本ではあまり馴染みがないかもしれませんが、そのような状況に置かれればなんとかありますから心配ありません。

Q2: JT-60やJETなどの大型トカマク装置の建設経験・ノウハウをITERに利用するということにはこだわらないのでしょうか？

A2:JETなどの大型トカマク装置の経験者は比較的少なく、個人的にはもっと多いほうが望ましいと思います。ただし、マグネットに関しては、ITERでは超伝導コイルなので大型トカマク装置のマグネット（常伝導）とは異なる部分もあります。

Q3:職場の勤務管理はどのようになっていますか？

A3:現在、出勤・退勤は自己管理ですが、今はVisiting Researcherなのでこういう勤務管理なのかもしれません。

Q4:ITER機構の内部で仕事していて、現在の問題点などについて広く情報を入手できますか？

A4:ITER機構では、職員の業務範囲が明確に定められていて、組織としてはかなり縦割りになっていますので、広く情報を入手するには他の部門の人と意識的に話をして、情報を入手することが重要です。特に、日本人同士の話しから有用な情報を入手できます。帰りの通勤バスの中は、日本人の先輩達や日本からの出張者の多様な考えを聞くことが出来るのでとても有り難いです。

以上



写真 東海テクノ交流館リコッティで開催されたITER機構職員募集説明会の様子